福祉制度・サービスの「すき間支援」に関する
調査・研究報告書 2021

札幌市社会福祉協議会「さっぽろ総合福祉推進助成」助成金活用事業

Sustainable Welfare Idea Book

一般社団法人 札幌市手をつなぐ育成会

表紙の絵：「千葉　大陸」　/　深宮　恭一郎（2012年作）

Book design concept

親･子ども･支援団体･行政の｢すき間｣を福祉制度・サービスがつなぐ社会を表現しています。

目次

～はじめに～ ・・・・・・3

第１章　調査の概要

１．調査の背景と目的 ・・・・・・4
２．報告書の構成 ・・・・・・4

第２章　アンケート調査

１．調査概要 ・・・・・・5
２．集計結果 ・・・・・・5
３．「すき間」のサポートに関する意見･アイデアと考察 ・・・・・・10

第３章　シンポジウム

１．実施概要 ・・・・・・28
２．グループディスカッション ・・・・・・29
３．シンポジウム参加者紹介 ・・・・・・33

～はじめに～

私たち「札幌市手をつなぐ育成会」は、「知的障がいのある人とその家族の幸せ」を願い、みんなが、地域で、普通に、「ともに生きる」ことができる社会の実現をめざして活動を続けている「親の会」です。その活動は、1959年（昭和34年）の結成から数え、ついに60年を越えました。
長きに渡って多くの方々に支えられてきた私たちの会員数は、現在、約1,200人。札幌市にある福祉関係団体のなかでは最大級の規模のひとつと言えます。大勢が集うことに確かな喜びを感じると同時に、多くの声を集められる立場として、その「公共性」に強い責任を感じています。

このたび私たちは、会員向けアンケートを行い、旧来から福祉業界に横たわっている課題である、「支援のすき間」をあらためて洗い出すことにしました。これまで何度も耳にしてきた問題から、昨今の激動の社会情勢を踏まえた新しいものまで、「多くの声」が寄せられています。
これらの声を、福祉世界の「旧来」と違う方法でも最大限活かすため、今回、この報告書は、広く「外の世界」に拡げて発信することにしました。官公庁や地方自治体、福祉業界のみならず、SDGs等に関わる社会貢献活動に熱心であるとお見受けした企業や企業団体、教育・研究機関等にも積極的に送らせていただいています。
知的障がいのある人の生きる世界にある「ままならなさ」＝「すき間」を埋めるアイデアを突き詰めると、それは、誰もが生きやすくなるアイデア、すなわち、これからの未来を創るユニバーサルデザインのアイデアになります。
私たちは、前述のアンケートを補完し、それにさらなる「公共性」を付与するため、様々な立場の「親の会」などの関係団体のみなさまとの議論や検討も加え、ようやく「アイデアのたね」を「外の世界」にお届けできることとなりました。混迷の時代を切り開くための、新年度の企画立案等にご活用いただければ幸いです。

ご協力いただいた関係団体のみなさま、また、本企画にご助成くださった札幌市社会福祉協議会をはじめ、関わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。
この「アイデアのたね」を集めた報告書「Sustainable Welfare Idea Book」が その届いた先々で、多くの人々の笑顔が咲く一助になることを祈っています。

令和4年3月吉日

一般社団法人札幌市手をつなぐ育成会 副会長
（本書企画・編集：Mental-Consul 代表）
相内 雄介

第１章　調査の概要

１．調査の背景と目的

親を亡くした障がいのある子の生活支援や財産管理といった「親なき後問題」が社会全体の大きな課題となっています。

本調査は、これらの課題に対して、現状の福祉制度・サービスの「すき間支援」に関する意見・要望について、障がいのある子を抱える保護者を対象としたアンケート調査及び支援団体の専門家によるワークショップから把握し、今後の具体的なソーシャルアクションを活性化させるための資料を作成することを目的としています。

なお、調査にあたっては、札幌市社会福祉協議会の「さっぽろ総合福祉推進助成（通称：SS助成）」を受けて実施されるものです。

２．報告書の構成

本報告書は、調査結果を整理するとともに、広く行政・企業へ情報提供するためのアイデア集「Sustainable Welfare Idea Book」としてとりまとめるものです。

アイデア集は、大きく福祉制度・サービスのすき間支援に関する「アンケート調査」、具体的な支援策のアイデアを出し合う「シンポジウム/ワークショップ」の２つの結果から構成しています。

「Sustainable Welfare Idea Book」

「アンケート調査」

- 障がいのあるお子さんの基本情報
- 住まいの状況
- 福祉･医療サービス等の利用状況
- 「すき間」のサポートに関する意見･アイデア

「シンポジウム/ワークショップ」

- グループディスカッションでの意見・アイデア

第２章　アンケート調査

１．調査・研究の背景と目的

(1)調査目的

障害福祉サービス事業等の「支援のすき間」の課題に対して、障害福祉サービス利用者の保護者を対象としたアンケートを実施し、集計・分析することで、知的障がい者分野の具体的課題を抽出し、効果的な事業企画・展開の基となる情報を収集することを目的とします。

(2)調査対象　障害福祉サービス利用者の保護者
（「一般社団法人札幌市手をつなぐ育成会」の会員約1,100名を中心とした保護者）

(3)調査方法　直接郵送、同封の返信用封筒による返送方式

(4)調査期間　令和２(2020)年11月1日～令和2(2020)年12月18日

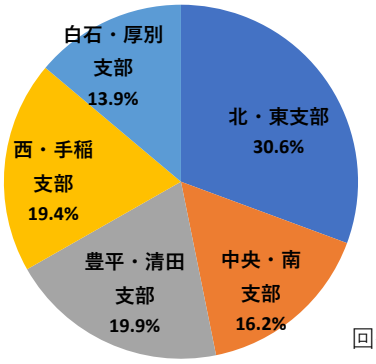
(5)回収数　382件

- 各設問の集計では無回答は母数から除いているため、グラフで標本のデータの個数（n値）を表記しています。
- 集計グラフ中に表記されている割合の数値は小数点第2位を四捨五入しているため、誤差が生じている箇所があります。

２．集計結果

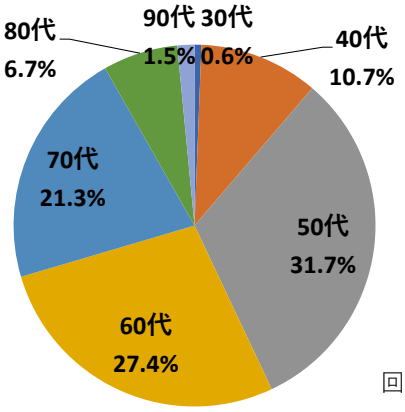
(1)回答者の所属支部・年齢

- 保護者の【所属支部】は、「北･東支部(30.6%)」が他支部より多くなっています。
- 【保護者の年齢】は、「50代(31.7%)」が最も多く、次いで「60代(27.4%)」、「70代(21.3%)」となっています。



回答数：346
（記述式）

【所属支部】



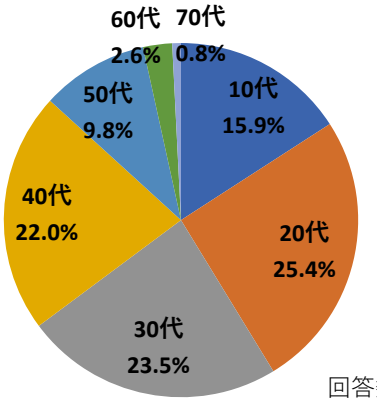
回答数：328
（記述式）

【保護者の年齢】

(2)障がいのあるお子さんの基本情報

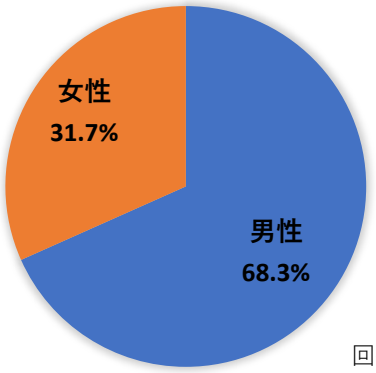
障がいのあるお子さんについて教えてください。

- 【年齢】は、「20代(25.4%)」、「30代(23.5%)」、「40代(22.0%)」がほぼ横並びで、あわせて全体の7割を占めています。
- 【戸籍上の性別】は、「男性(68.3%)」が「女性(31.7%)」より多く、全体の2/3程度となっています。
- 【続柄】は、「長男(49.9%)」が最も多く半数を占め、「長女(23.3%)」、「次男(17.2%)」の順となっています。
- 【兄弟姉妹の有無】については、「いない」と答えた人が87人と回答者全体の約1/4となっています。兄弟姉妹がいるとした回答の内訳は、「兄(108人)」が最も多くなっています。兄弟姉妹の人数でみると、「1人(67.4%)」が全体の2/3程度で、次いで「2人(28.5%)」となっています。
- 【居住地】は、保護者の所属支部同様、「札幌市北区(19.6%)」、「札幌市(東区(11.9%)」が多くなっています。
- 【就学・就労状況】については、「福祉就労中(73.7%)」が全体の約2/3を占めています。その他、「就学児(13.3%)」、「一般企業に在職中(12.4%)」となっています。



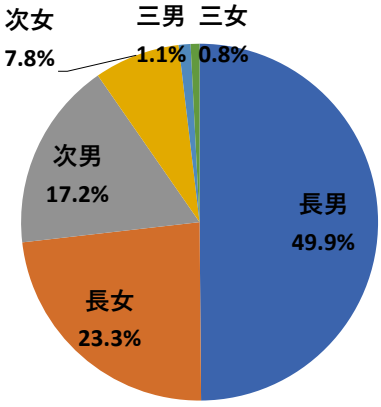
回答数：378
（記述式）

【年齢】



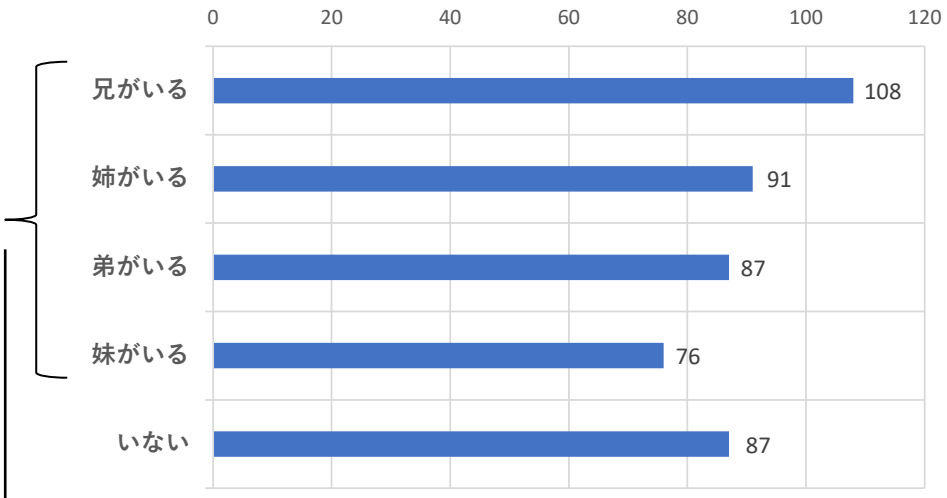
回答数：382
（単一回答）

【戸籍上の性別】



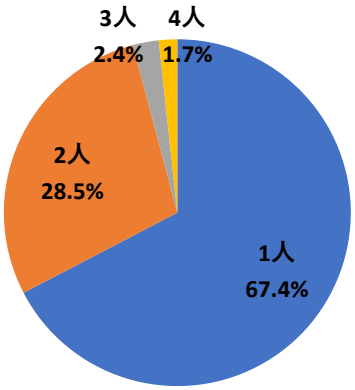
回答数：373
（記述式）

【続柄】

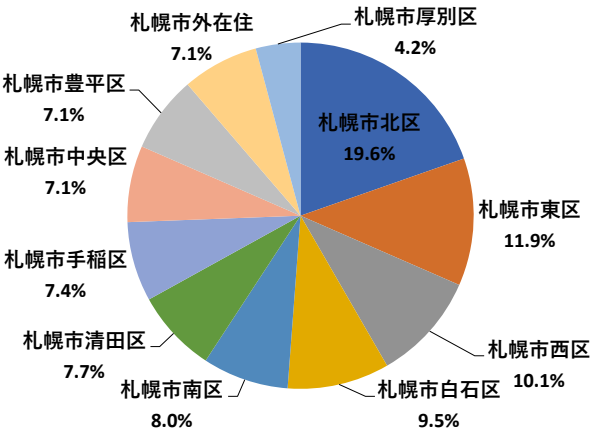


回答数：382
（複数回答）

【兄弟姉妹の有無】

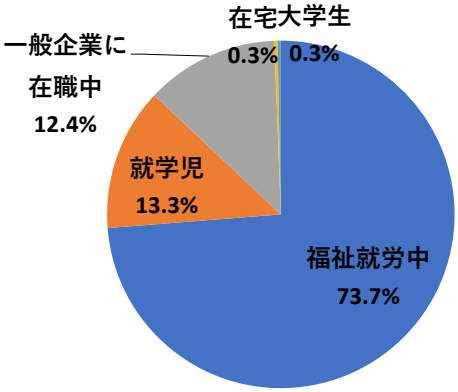


【兄弟姉妹の人数】



回答数：336
（単一回答）

【居住地】



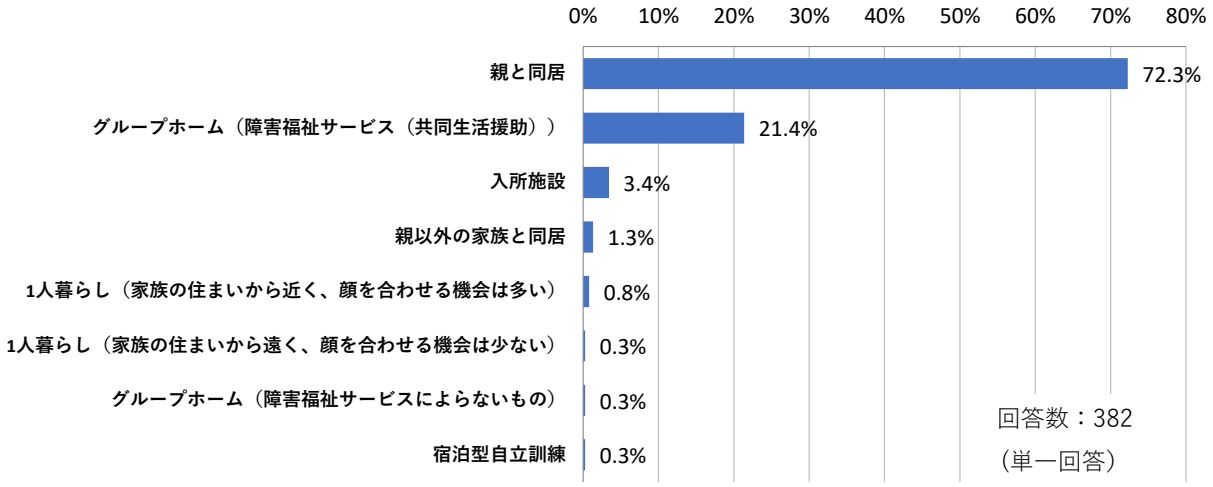
回答数：339
（単一回答）

【就学・就労状況】

(3) 住まいの状況

障がいのあるお子さんのお住まいについて教えてください。

➢ 【住まいの状況】は、「親と同居(72.3%)」が全体の約7割を占め、次いで「グループホーム(障害福祉サービス(共同生活援助)(21.4%)」となっています。

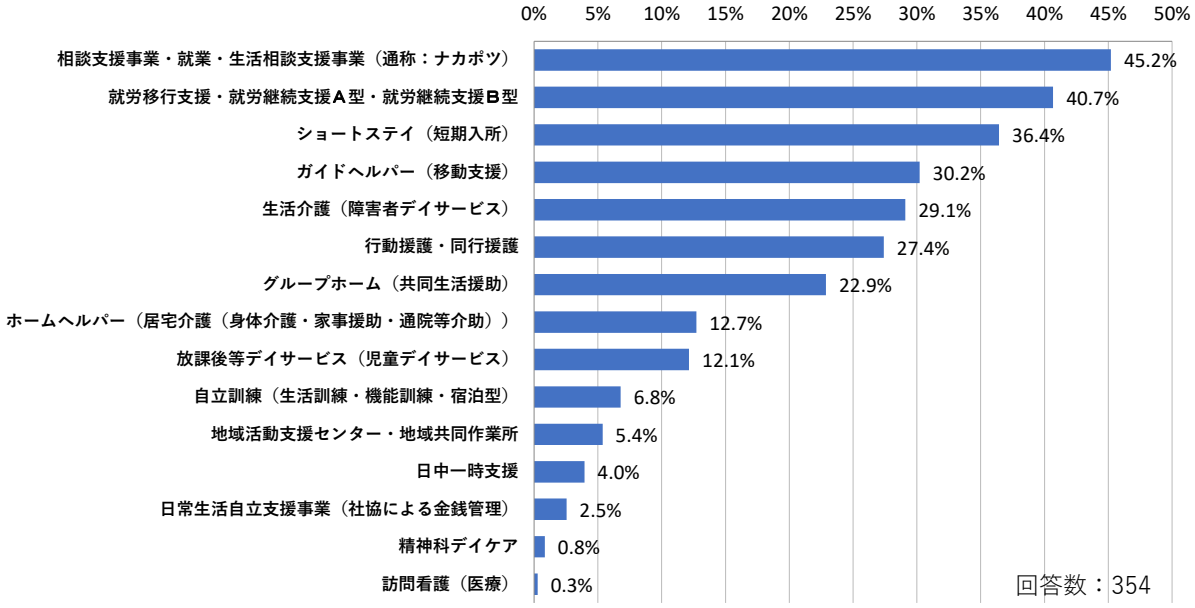


【住まいの状況】

(4) 福祉･医療サービス等の利用状況

障がいのあるお子さんが利用している福祉･医療サービス等を教えてください。

➢ 【福祉・医療サービス等の利用状況】は、「相談支援事業･就業･生活相談支援事業(45.2%)」が最も多く利用され、次いで「就労移行支援･就労継続支援A型･就労継続支援B型(40.7%)」、「ショートステイ(短期入所) (36.4%)」となっています。

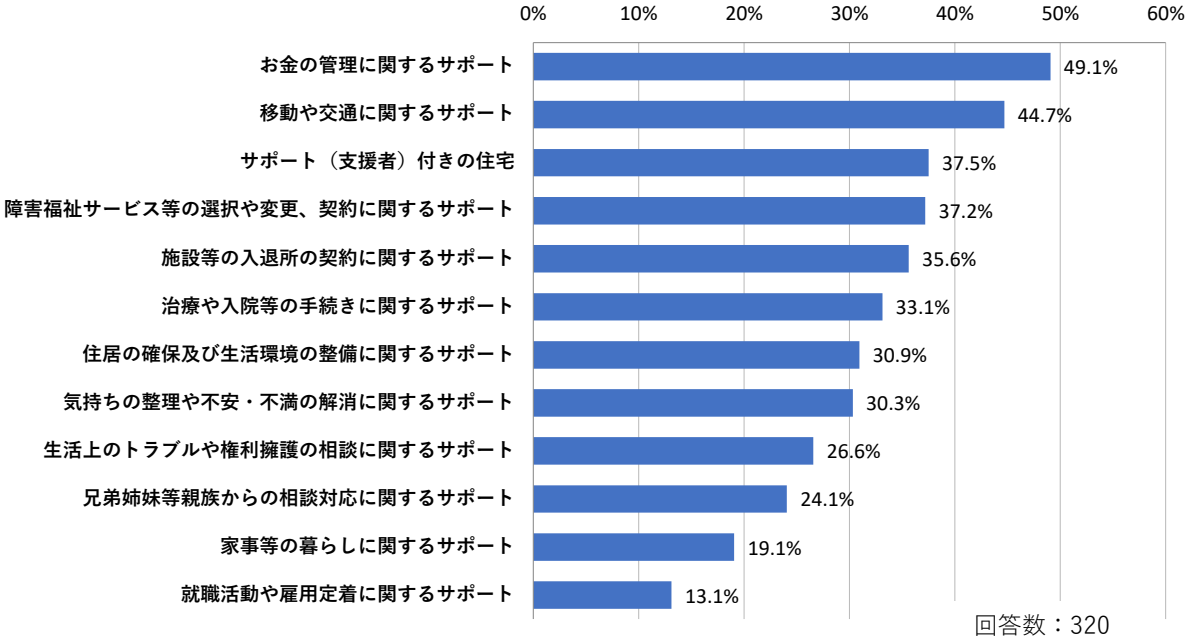


【福祉･医療サービス等の利用状況】

(5) 希望するサポート内容

障がいのあるお子さんの「すき間」のサポートとして、どんなことを希望しますか。

➢ 【希望するサポート内容】については、「お金の管理に関するサポート(49.1%)」が最も高く半数程度の回答者が選択しており、次いで「移動や交通に関するサポート(44.7%)」となっています。その他の項目についても、3割を超えるものが多く、求められるサポート内容は多岐にわたっています。



【希望するサポート内容】

(6) グラフ集計総評

- グラフを見ていくと、まず、親の高齢化の問題が目に飛び込んできます。次に、親と同居している障がいのあるお子さんが多いこと、希望するサポートとして日常的な活動に関するものが多いことなどに気がつくでしょう。いわゆる「親なき後」の問題を憂いながらも、現状なかなか手をつけることができていない事実が浮き彫りになっています。
- 「親あるうち」にまずはどこから手をつけるべきか、という情報に親は飢えています。「情報化社会」という言葉さえ死語になりつつある現代ですが、その恩恵にあずかれるのは時代の最先端をいく世代だけであってはなりません。障がい者や高齢者、情報弱者と呼ばれる者にこそ情報が行き届いてこその情報化社会であるはずです。
- 埋めるべき「すき間」は、制度やサービスの間だけではなく、情報と人々の間にもあることを忘れてはなりませんね。

3．「すき間」のサポートに関する意見･アイデアと考察

希望する「すき間」のサポートの項目についての意見（自由記述）を整理し、それらに対する「つぶやき（考察・アイデアのたね）」を加えて、今後の具体的なアクションへ向けたヒントとなるものとしてとりまとめます。

(1)生活の場

＜グループホーム・サポート付き住宅＞

- 突発的な事柄が起きた時、安心して子どもを託すことができる場所があれば…
- 24時間支援者が付いている住宅があれば（てんかんがあり、行動が遅く、声掛けで次の行動が移せない）
- ＧＨ・入所施設などの空き情報・特性など開示情報がいつでもわかるようにサポートがあれば
- 親と同居しているので全て親が手続きはしています。今後グループホームなどを利用し、親ができなくなった時が心配です。グループホームなどには支援者が同居してくれると安心です。
- 私たちはグループホームに入って一人で生活をして欲しいと思っています。私たちは先に亡くなるし、考えます。子どもも年を取ります。道をつけてやりたいです。仕事はしていますけど、友達がいません。
- 成人以降、親がいなくなった後、今の生活に近い形で生活介護に通えるような住宅が増えて欲しい。
- 現在一般企業で働いています。残業で帰りが21時を過ぎることもあるので、将来融通の利く住居に住めるといいと思っています。
- 老人になっても、1人で生活していくために、老人ホームのような形でもサポートでも良いですが欲しいです。親なき後一人になった時に安心して生活できる場が欲しいです。
- 現在は家にいてお金の事は母親が管理しています。将来は家から独立して暮らしてもらいたいと考えています。そのことでサポート付きの住宅などを考えています。
- 兄弟が一緒に入居できるグループホームのサポート
- 親が年を取って施設等に入った時に、その施設のそばに本人（子ども）の入所施設があって、時々会えるような状況をつくれたらよいなと思います。また、本人（子ども）の入所施設から毎日のように作業に通え、時々移動支援を受けた街の中に出たり、温泉へ行ったり、カラオケに行ったりできたらよいなあと思います。親が死んだあと、一年に一回くらいでも兄姉に会えて、一緒に買い物したりお泊りしたりできたら嬉しいです。
- 高齢の親と障がいのある子どもが一緒に入居できるサポート付きの住宅かＧＨの計画案を聞いた覚えがある。少子高齢化が進み、障がいを持つ子の親は地域から孤立しがち。
- 女性専用のサポート付きの住宅があったら利用したいです。
- 一人で暮らせば様々なことにサポートがいると思いますが、現在家族と同居していることもあり、学齢期以外ほぼサポートを受けたことがないため、どんなことを必要とするのかわかりませんでした。
- アットホームな環境での暮らしを望んでいるので、サポート付きの住居がふえてくれたらよいし、マッチングの相談を専門にやってくれるところがあったら良いと思っています。
- 昨年、グループホームを考えてはと言われ見学にいきましたが、本人が嫌がったので行っていません。

- 近い将来はグループホームにと考えていますが、なかなか先が見えず不安に思っています。
- グループホームを探していますが、見つかりません。絶対数が少ない。
- 今は自宅で家族と住んでいるので、将来のことはまだ想像できないのですが、いつかはグループホームに住んで自立してほしいと考えています。
- グループホームや施設ではなく、必要な時だけサポートを受けながら一人暮らしができれば、若いうちに自立させたいと思っている。今は資金面も不安だし、近くにそのような住まいもなく、同居しているが、親も高齢になっていくので、勤務先に近い場所で住まいを見つけてあげたいと思うが、相談室の方でも見つけられず困っている。
- グループホーム等で夜間に個別にサポートして欲しい。
- グループホーム入所後のアフターケア
- グループホームに住んでいますが、お金の事や髭剃りが壊れた・パソコンがおかしいなど電話がある。親がもっと年を取った場合のことが心配である。
- グループホームの暮らしに夜の歯磨きサービスが是非欲しい。

＜体験入所＞

- 年に1～2回でもお泊りの経験をさせてほしい
- 全寮制の高等養護学校時代の嫌な経験から抜け切れず、グループホーム等への入居への拒否感が強く、自宅での生活に固執しています。親なき後を考えると大変ですので、入所訓練的な制度があれば良いと思います。

副会長の全力つぶやき

- 24時間サポート施設は、保護者たちの永遠の夢ですよね。ただ、テクノロジーの進歩が近い将来解決してくれる予感はしています。例えば、グループホームの運営法人と契約する夜間対応サービスがあって、そこが夜間緊急時にオンライン対応するシステム等は実現可能だと思います。最近は、タッチパネルの進化によって、複雑な操作がなくとも、感覚的に操作できるものが増えてきたのは知的障がいのある方々等には有難いですよね。自分から発信できなくても、カメラで異常な挙動を捉えるとトラブルを予測して通報するAI等のシステムは、既に各所で活用されています。案外、警備会社で相談支援員経験のあるスタッフを雇う等して実現できるかもしれませんね。
- 入所施設と通所施設が併設されたオールインワンタイプの施設や、親子が同じ施設で支援を受けられる介護福祉サービスと障害福祉サービスのハイブリット施設を求める声は年々高まってきている感があります。すでに実現可能なものもありますが、制度上のインセンティブがあれば検討する法人は増えるでしょう。他事業運営法人は不正も働きやすくなりますが、行政の目が入る機会も（委託でも）増やせばよいことばかりだと思いますけどね。
- 一部の心無い支援者（もどき）が経済的虐待（ないし窃盗）を行うリスクがあり、リスクマネジメントとして金銭管理を拒否するグループホームや相談室（相談支援事業所）は増えてきているようですが、これは、第三者の監査機能が入ればある程度は解決できる問題だと思っています。例えば、弁護士会主導で、弁護士やＦＰ等で構成する団体を設立して、その監査を受託するとかどうでしょうか。入居施設探しに特化した相談室（相談支援事業所）があってもよいかも。国交省所管の住宅確保要配慮者居住支援協議会との連携でいろいろできそうな予感はします。

- 未知のものには不安がつきもの。逆に言えば、獲得できる情報が多ければ多いほど不安は軽減していきます。例えば、360°カメラで撮影したグループホーム画像を用いて、まずはVRから見学に慣れる、モデル生活の動画を観られる、等のシステムがあるととてもイイ。各都道府県・政令市に一つずつでもそんなサイトの運営団体があってほしいですね。アフィリエイト等を活用して民間運営も可能でしょうが、公的性格が強いサービスになるでしょうから、国が自治体に補助金出して、自治体はそれを活用して直営か委託かすれば理想ですね。そうすれば一気に拡がると思います。
- 訪問看護ならぬ訪問生活相談やオンライン生活相談はいいですね。SOSを待つより、月１とか月２とか、定期相談を原則とした方が、問題を見逃さないでしょう。個人ではZoomができなくても、LINEの普及率は高いですから、オンラインも充分いけると思いますね。
- 一般就労していない障がいのある方でも定期健診を受けられる仕組みはあった方がいいですよね。ご本人は言わずもがな、国も医療費削減に繋がるわけですから、Win-Winです。就労継続や就労移行、グループホーム、地域活動支援センター等で実施した場合の加算や補助があればなぁ。
- 一人暮らしの練習事業として宿泊型自立訓練がありますが、正直世間の認知度は低いですよね。効果的な支援ができれば、認知度も設置数も増えると思うんです。ジョブコーチの配置で助成金が出るようにできませんかねぇ…JCは労働系の予算でしょうから難しそうな感じはしますが、絶対訓練効果は上がりますよ。
- グループホームへの引っ越し＝自立、であるという風潮が一部にある気がします。しかし、親なき後に、持ち家（きょうだい等が相続）にて、障害年金・就労継続支援・居宅介護・相談支援等の合わせ技で、住み慣れた我が家で生活し続けている方々も私は多く知っています。同じようにサービスを組み合わせて、生活保護を受給し適宜CWに相談しながら、毎日を楽しまれている方々も知っています。どれが正しいということではありませんが、本人に合ったところを熟考するためには選択肢は多い方が良いでしょうね。

(2)金銭管理、成年後見、契約・申請行為支援（親なき後問題含む）

- お金の管理ができず、私の妻が行っていることから、それを代行できるものがあれば良いです。家計簿の管理等。兄自身、欲しいものを貯金を下ろしてすぐに買ってしまい、貯金管理も不可です。
- 将来グループホームで生活する際、お金の管理が心配です。グループホームの方に任せられるのか、本人がお金の管理を相談できる所があればと思います。
- お金の管理　来年就労する予定です。もらったお給料から毎月定額で積み立て貯金や満期になった時などの手続きの仕方のサポート。もし保険に入るのであれば、入り方や更新等の手続きのサポート
- 通帳などの管理していただき、無駄使いのないよう必要分だけ渡すサポート
- 何の保険に入っているのか管理していただき、何かあった時にその保険が使えるようサポート。また、入った方が良い保険があればお知らせするサポート。（親がいない場合）
- 親がぼけた後のお金の管理や、施設入所の書類手続きなどが兄弟がいないので不安です。
- 今は親と暮らしていますが、グループホームなどに入った場合は、お金の管理や契約や手続きもお願いしたいです。今は普通の生活に戻る日が早く来ることを願っています。
- 母は高齢（96歳）で、介護度5で施設入所。弟は鎌倉在住、母が施設に入る以前より姉の実家への帰省の面倒を見てきた。母なき後の相続（家・土地）等の相談。（妹さん代筆）

- 現在親は健在ですけど、身体の不調だったりして、子どもの事が見れなくなった時やはり心配なのはお金の管理です。このことをしっかりサポートしていただけたらと思います。よろしくお願いします。
- 親なき後のお金の管理、入院退院等の手続きとか大事な書類の手続きなど、兄がいるのですが遠くにいて、近くで相談室に頼るようになると思います。
- 福祉サービスの手続きや病院の通院は親が行っていますが、それを本人の希望も聞きながら一緒に行ってもらえるサービスがあれば安心です。・福祉ｻﾋﾟｶ更新、福祉サービス利用更新、新生のためのドクター診断書作成依頼など、親がいる間はやってあげられますが、親なき後本人に書類がきてもできないと思います。更新などサービスを切れ目なく受けられるようサポートしていただけるとありがたいです。
- 区役所の窓口で相談したり手続きをする場合、付き添いがなければ説明できない（要件などを）。一人でも窓口で手続きできるような仕組みが望ましい。
- 親の老いた後や死後に安心して財産を託し、子どものために運用してくれる制度がきちんとあれば良い。弁護士や施設は信用できない。使い込みがこわくて利用できない。
- 今後の一番の悩みは、親なき後の生活全般のサポートを誰にお願いできるかです。信頼できる団体に全てを託せるサービスがあったら是非お願いしたいです。
- 一番心配なのは、親なき後の生活維持。箱や環境の土台はある程度整えてあげられても、それをきちんと維持するシステムがどれだけあるのか気になります。金銭管理はもちろんですが、本人の意思をちゃんと時間と手間をかけて引き出してくれる支援者にちゃんとつながっていけるかどうか。他人が密着し過ぎる環境は好ましくないのかも…と思う一方で、密着してくれないとわかってもらえないジレンマもあります。基本は一人の利用者に対して複数の支援者が理解を深めて接してくれるようなシステムかな？と感じます。具体的じゃなく申し訳ない…
- 親なき後、または親の判断能力が無くなった時の本人のサポート（暮らし、お金、医療）の窓口になって、本人と関係機関をつないでほしい（本人のことならこの人に聞いて！という人もしくは機関）
- 今現在ということでは特に希望はない。但し、親なき後についてはサポートが欲しい。独立しているきょうだいとのつなぎ・連携、利用先からの連絡をかみ砕いて伝える、本人が理解できているかの確認、おそらくＧＨか利用先、もしくは相談支援事業所がやってくれるであろうとは思うが、気がかりは気がかり…ちゃんとＳＯＳに気づいてもらえる？親が死んだら、または施設に入所したら、入院したらスタートするサポートがあったら安心
- 現在、両親共に健康で息子と共に生活できているが、将来の親が亡くなった時のことを考えるととても不安である。親なき後のサポートが必要となってくる。
- 成年後見人をつけることにはなると思いますので、「お金の管理」や「契約に関すること」はカバーされる可能性があります。それら以外の部分のサポートを希望しています。
- 現時点では、やはり両親の死後、子が安心して生活していける為のレールを敷いてくれる為のヘルプ・サポートを希望する。
- 今は親が元気ですが、亡くなった後どうなるか？たまにでいいので見に来て欲しい。
- 親二人とも高齢ですが、子を残して死ねないとの思いが強く、こればかりはどうなるかわかりません。親なき後の支援をお願いせねばならないことが切なる願いです。
- 親なき後は兄弟も地方に住んでいるため、その時にはあらゆるサポートが必要になってくると思います。ただ、人に気持ちを伝えることがうまくできないので（困ったことや聞きたいことがあってもどう聞いていいかわからないなど）なかなかコミュニケーションがとれません。親

- は察することができたり、親には本人も言えたりするのですが…いろいろなサービスを受けながら生活していくしかないのですが、そのあたりが心配です。
- 高齢になった時のサービスの移行をどう手続きしたら良いか？本人に合った環境作りの相談対応の仕方
- 社会福祉協議会による金銭管理はもういっぱいで、新規にお願いするのは難しいと聞きました。望む人皆が受けられればと願います。
- スマホ等商品購入・契約のサポート。現在、後見人制度を利用していますが、もっと身近にグループホーム等に、購入した商品の使い方、スマホは特に知らないアプリが入ってしまったりするので、定期的にチェックしてくれる人がいると良い。後見人からの家賃の支払、生活費の入金確認、お金の使い方の指導など、親なき後の支援をお願いしたい。（最近こうにゅうしたゲームソフトがネットに繋げないと使用できないので、親でも難しく、もっと複雑になってくると思われます）
- 年齢が上がってくる頃に携帯・スマホなど使用することを考えると周囲に悪用されないか不安があります。自己管理含め、本人が理解できるようお話し（説明）できる方希望です。
- 私が亡くなったら誰がするの？というものをチェックしてみました。特に日々の生活の中の取るに足らないような困りごと・相談や、余暇のためのチケット（ライブ等）の手配とか…（今クレジットが必要なものも多くて）
- 入院、治療　きょうだいがいないので、入院した場合の保証人等
- 現在はまだ10歳なので直接は関係ないんですが、お金の管理について詳しく学ぶ機会が欲しい。
- 親なき後の財産管理～信託制度等。成年後見人の選任等
- 親が元気なうちは良いけれど、何かあった場合が心配（兄に負担かけたくない）成年後見を使うとしても、子どもの事をわかってくれているのか？お金の管理しかしない後見人もいる…何か良い方法はないのか？（ちょっとズレているのかもしれませんが）
- 成年後見人をつけてほしい。親なき後の安定生活のため、金銭・事故防止。福祉支援者が成年後見人になるのが望ましい。
- 様々な親なき後の著書を読んでいますが、結論は出ず…本人がサポートを受けられるように、道筋をつけていかなければいけないとはわかっていても、まず何から手を付けてよいのか第一段階どこに相談して始めるべきかも思案中。
- 親の会に入会して40年経ちます。やはり最終的に困った時には親の会だと信じていますので、脱会せずにここまで経過しました。やはり一番不安なのは、親なき後の問題です。居住のこと、生活のこと、お金の管理のことなど様々にあります。代弁者であるリーダーさんに、大変だと思いますが、是非頑張っていただきたいと思っております。

副会長の全力つぶやき

- 「スマホに怪しいワードが検出された時点でスクリーンショットを自動的に家族や地域の警察や消費者センターに送るアプリ」はそんなに開発難しくないですよね。会話内容によって自動連絡するアプリも、きっと難しくないですよね。きっと高齢者を守るアプリにもなるでしょう。
- ちょっと発想を飛躍させまして、こんなのはどうでしょう。警察は、原則民事不介入ですが、「誰でも使用可の面談スペース」を設けることは可能な範囲じゃないでしょうか。そこは、（座っているだけでも）警察官がひとり常駐していて、常に録画録音されている部

- 屋。なにか怪しい話を持ち掛けられたと思ったら、「警察の面談スペースで話を聴いてもいいですか」と切り出す。おそらく、やましいことがない相手であれば「いいですよ」となるでしょう。断った相手とはもう連絡取らない！そんな使い方どうでしょう。高齢者、障がい者、気の弱い方、使いたい人は山ほどいるはず。例え犯罪を未然に防げなかった場合でも、原則警察に責任を求めない（捜査はお願いする）こととすれば設置可能じゃないかなぁ。それでも十分抑止力にはなると思うんです。
- 財産管理の社会資源として、後見人、遺言作成、信託、相談室（相談支援事業所）、日常生活自立支援事業等…それぞれどんなことができるのか、どんな組み合わせでどこまでカバーできるのかなど知りたいことは山積みですよね。この辺の色々なモデルケースをあつめた事例集など、できれば公的機関から出してほしいですよねぇ。公的機関の性質上「オススメ」は無理だろうけど「事例集」なら可能な範囲ですよね。個人的には、後見人さんと相談室が連携して、権利尊重が図られている好事例をいくつか知っています（そうでもあるんでしょうが…）。

(3)医療支援

＜医療支援＞

- 家で診療してもらえる「ファストドクター」のようなサービス。例えば、本人が病気になった時、場所の変化に本人が対応できず、病院に連れて行っても診療できない場合。親が病気になった時、子どもが留守番などできないため、病院へ行けない場合。「ファストドクター」関東・関西一部でやっている往診サービス（有料：健康保険適応）LINEから診察依頼できたり、web経由で相談も受けてもらえるし、往診してもらえる。
- 障がいのため、病気になってもどこの病院がいいのかわからないので、例えば障がいのある人に特に理解のある病院・診療所など相談にのってくれると良いと思います。
- 治療や入院等の手続きと共に、親がまだ付き添いが出来ているけれど、この先入院（検査のために1泊しなければいけない時を含め、治療のため数日の入院）などの時に、有料でも頼める人や事業所があるのか？一人では泊まれないし、病院も受けてもらえない現状があるので…。
- インシュリン注射は医療行為と言われていますが、本人が打てれば周りのサポート（目盛りや梁の始末）があれば、看護師さんがいなくても可能だと言いますが、現在の体制の中では何かあったらを理由に、宿泊など自宅以外で生活できる場所が無くて、家で見れなくなった時を考えると頭を悩ましています。看護師さんの配置を多くするとか、介護者の研修を通して許可証のようなものを発行するなどして対応してもらえないかと、この間ずっと発信していますが、聞いてもらえていない状態です。

＜通院支援＞

- 今現在不自由に感じていることは、通院させる際、母（私）が仕事でなかなか休みが取れなくて、病院に行くことができないことがたまにあることです。できれば車で送迎があって、薬をもらってきてもらえると助かります。毎回じゃなくても、1年に2～3度代わりにつれていっていただけると助かるような気がします。

副会長の全力つぶやき

- 知的・発達障がい等の特性の理解が深いドクターやコメディカルスタッフのニーズは昔から高いですね。支援団体等が留意してほしいポイントをまとめて、全国の医大や医療系専門学校に配布してみたりするところから始めても良いかもしれません。障がい者に優しい対応は、どなたにとっても優しいユニバーサルコミュニケーションになるはずです。
- 知的・発達障がい等がある方々の中には、1型糖尿病を患っている方々が散見されるイメージがあります。本人が打てない場合、それに特化した訪問看護の副業的事業とか、限定的場面で身近な人だけでも打てるようになる研修とかがあると、確かによさそうですよね。
- 最近、リモート診療が増えてきていますが、（それなりに厳しい条件はクリアするにして）昨今流行りの注文・配達プラットフォームと連携して、送薬の問題も解決できないでしょうかね。

(4)就労支援

- 仕事上の愚痴を親なき後、細かく本人の意向に沿って聞いて欲しい。
- 現在就労継続支援B型のサービスを利用していますが、いずれ生活介護に変更する時がくると思います。生活介護と就労支援B型を併用して利用しながら生活介護へ移行したいと考えています。

副会長の全力つぶやき

- 札幌市であれば、仕事上の愚痴を聴いてもらうところとしては、就業・生活相談支援事業所に併設されている地域活動支援センター(就労者支援型)が近いイメージでしょうか。愚痴を吐くだけで軽減されるストレスって確かにありますよね。最近なら、SNSでそんなサービスがあってもいいですよね。ネットを通せば声は集約しやすくなりますし、それがユニオン的な組織に届けられて、障がい者雇用の処遇改善活動に利用とかもいいですよね。
- ・障害福祉サービスの併用は、結構ちまたに誤解が広まっていたりします。自治体ごとに運用が異なっていたりするのが原因だと思いますが、各自治体で、「こんな組み合わせ方ができますよー」みたいな利用例も発信してくれると嬉しいですよね。

(5)相談支援

＜本人の相談場所の充実＞

- 急に何かあった時に相談できる、助けに来てくれるサポートがあると嬉しいです。料金表があって、いつ何をしてもらったらいくらかかるかわかると、本人も利用しやすいかも。
- 事業所探しをしたいが、子ども（本人）が相談しながら探せる相談窓口があると良い（相談室は知っているが、予約を取りにくい、混んでいる）
- 本人が困ったな…と感じた時に、電話やメールなどでアドバイスを受けられる。
- 本人が単身になった時、一人になった時、親なき後相談できる場所・窓口があれば、かけこみ寺などあればと考えますが、助けてが言えるような声が出せるといいのですが。＊終身までの長期的な支援があればと考えますが。
- 本人（障がい者）が今後の人生について兄弟で話し合うサポート。具体的には、もし親や（本人の）兄弟が亡くなってしまったら本人はどうすればいいか？もし、本人が病気になったらどうすればいいか？本人が知的障がい者なので、楽しいことや行きたいとこ（旅行）など一緒に考えてくれたらうれしいかな？
- 親なき後、兄弟にいろいろ託していく中で、本人が入院・通院・病院の選択など相談できたりできる機関がほしい。
- 役所からの文書、手続き、お金の事（預金する、生活費のことなど）はほとんどわかりません。自分の悩みなど日常のことを聞いてくださる方や、食事の補助など、お年寄りのケアサービスのような（時給で助けてくれる）ものがあればといつも思います。
- 自分の気持ちを人に話すことが出来ず、溜めてしまうので、月1回とか何か月に1回でも構わないので話を聞いてくれる（あまり話したがらないかもしれませんが）ところがあると、溜めこんで爆発をさせることが少なくなるような気がします。
- 本人の話し相手がほしい（趣味の話や雑談に付き合ってくれる人）
- 親なき後の兄弟姉妹の負担が重いというのを聞き（テレビなどで）サポート（兄弟の）するようなところが欲しいなと思います。親が気付かないことでもあったので、納得しました。それに一人しかいない兄弟姉妹だったら、なおさら不安でしょうし。（父母会・保護者会）のように、兄弟姉妹会があったら、同じような境遇で共感することもあるでしょうし、親がいない子供たちが本人もその兄弟も明るく元気で頑張れると思えるようなシステムが一つでもあると、親も残った子どもたちは大丈夫と安心して死にたいです（一番の願いです）
- 相談者の立場に添って共に考えてくれる相談室など。情報が偏りなく、少数派の意見も公平に情報公開してくれる相談室など
- これからの事では、私がもっと年をとった時、家で子どもと暮らす自信が無くなってきた時、お金のことや住まいのことなどサポートしていただけるところがあればいいなと思う。平日は仕事をしていてなかなか勉強会などにも参加できないのですが、子どもの将来のことを気軽に相談できるところがあると安心かと思います。
- 「人生の先輩」のような、時に「仲間」のような感じでいろいろなことを相談できるようなサービスがあると助かります。
- 親なき後の生活の確保について、優しく説明（すでに対応されている本人から）が欲しい。専門家（弁護士等）は営利を求めるので…。
- 現在通所中作業所は65歳までとのことです。親なき後の住まいなど今後を心配しております。ギリギリまで現在の生活をと思っていますが、いざとなった時にどこにどのように相談するのか、又いざとなる前に考えておける見通しが欲しいです。施設入所についてなどお金がどのくらいかかるのか、又入所できるのか知りたいです、できる準備があれば教えていただきたいです。

- 何か困りごとが出てきた時に専門の相談先へつなぐ役割をお願いできたらと思います。（まずは本人が困った時は、ここに連絡すれば何とかなるというような、一次対応的窓口と言ったらよいのでしょうか…）
- 将来的なことについて相談できるところがあればいいと思います。今のところ親がサポートできますが、これから先のことを考えると不安です。
- 特に今希望することはなく、今後のことで、私から姉に速やかに移行できるよう、自分も努力するつもりですが、待つ相談対応ではなく、積極的な対応があればと思う。抽象的ですが。
- 現在は親と同居しています。将来はグループホーム、本人が高齢になっても現在の社会福祉法人に関わっていただきながらの生活を希望しています。この件を含め、将来の相談をしていただけるサポートの必要を感じています。
- 福祉サービスを利用していないので、グループホームなど親と離れて暮らす場所を探す相談を受けて欲しい。
- 今は親と同居している。先々グループホーム等に入居と考えているが、相談したりサポートしていただける人や場所が身近にあると助かる。
- 就業支援事業所に通所した後、一般小売事業所に就職したが、幻覚・幻聴が激しくなり、やむなく退社となり、以後精神科に通院している。
- 聴覚過敏のため、苦手な音ですぐ癇癪を起し自傷行為をします。息子に合った生活の場を教えて欲しいです。

副会長の全力つぶやき

- 最近、自治体が運営するものでもSNSでの相談ポータルなんかも増えてきましたよね。民間でボランティアを利用して、24時間対応可能な相談ポータルなんてのもちらほら聴きます。従来の相談支援事業の拡充の方向性として、SNS対応は増えていくべきだと思います。これらに、（対話中に）画像や動画を「簡単に」やり取りできる機能等もあれば、文書や申請関係の疑問の解決件数も増える気がしますね。
- 「どこに相談していいかわからないことを相談できるところ」は、ずっと昔から求め続けられていました。おそらくは今後は「重層的支援体制整備事業」がそれに近い役割を担っていくのでしょうが、出張相談会のような「そっちから近くに来る」的な機会はいままで以上に増えて欲しいと思います。それでも情報が届かない人には届かないものです。エリアメールとかって活用できないもんですかね。案外、石焼き芋の軽トラのスピーカーのように、アナログに会場や時間を言いまわるのが良いこともあるのかもしれません。
- 「このタイミングが来たら〇〇〇しましょう」というアドバイスは、得てして、当のタイミングの時には忘れているものです。特定のメッセージを未来の自分に送るサービスって、（電話番号やメールアドレスを変えないとかの条件を付ければ）なんか作りようがありそうですよね。マイナンバーカードがフルに活用できる未来が来たら、（情報保護の問題さえクリアすれば）自分の相談履歴を記録しておくこととかもできるんだろうか。
- なんらかの医療を受けている障がいのある方の就職は、医療と仕事の連携が取れているかによって定着率は大きく変わります。これは企業社会にも医療業界にも両方に周知したいですね。
- 障がいのある方だけでなく、高齢の方も、騒音や一定の周波数の音に敏感な方はたくさんいます。その手の音を緩和できる、後付け可能な建材等があれば、きっと飛ぶように売れるでしょうね。

(6)通学・帰省・通所の移動に関する支援

＜通学支援＞

- 小学校(支援級)が大変遠く、仕事が終わってから急いで車で高速道路を使用し週1回迎えに行っています。他の曜日は放デイや下校バスを使っていますが、どうしても週に1日だけ私が学校まで迎えに行かなくてはなりません。その送迎だけでも頼めるところがあればありがたいです。
- 登校や下校時のサポートをもう少し使いやすくしてもらいたいです。例えば、移動支援を使い、「下校（バス停）から自宅」の付き添いはできません。あくまでも自宅出発⇒まず下校始点のバス停に行き、そこから折り返し⇒自宅まで下校訓練⇒自宅に着いたのち、デイサービスの利用のための送迎を待ち⇒デイ利用」という流れです。同一法人さんのサービスを使ってもこの流れなので、もう少し簡単に使えるとありがたいです。（私が制度（今あるもの）を上手に利用できていないと言うこともあるのかもしれませんが…）
- 通学支援　自立登校=一人登校？重複障がいの場合は？下校時～デイ（習い事）までの移動支援、習い事等の介助支援、通院、訓練。
- 高校の寄宿舎から自宅までの移動（公共交通）のサポート（見守り）
- デイサービスが無い日の札養からの帰り（バス停から自宅）の移動の見守り
- 利用している事業所の移動支援が1時間以内の範囲でしか使えないと聞いている。急に単発でこの日お願いしたいということができる、お出かけについていける、そのようなことができる事業所がない。通学の見守りなど、高校ではさりげなくついてくれるサービスがあって欲しいと思うが、移動支援は基本9時～17時の利用となっており、使うことができない。
- 学校や目的地に行く（一人で）練習をしたい（登校練習）

＜帰省支援＞

- グループホームから帰省する際の移動のサポート。
- 交通機関を利用しての帰省送迎サポート
- 週末など自宅とグループホーム間の送迎は、親ができるうちはいいのですが、年を取って車の運転ができなくなった時や、運転ができるうちでも急に行けなくなった時など、支援してもらえるサービスがあると嬉しいです。
- 現在グループホームに入居し、週末帰省している。今のところ主人（70代）は持病をもちながらも車で片道約40分かけ送迎しているが、3年後位に運転免許を返納する予定。その場合は公共の乗り物とタクシーなどでと思っているが、これから身体的に負担になってくる場合の送迎を依頼できればと願っている。・帰省の送迎、今は私が送迎しているが、自宅までの送迎（片道）だけでもサポートしていただけると助かる。
- グループホームへの送迎
- ・自宅から片道30分の施設から、月2回帰宅しています（今年はコロナでだめです）今後も続けたいと考えています。本人も楽しみにしていますが、親の方が高齢で送迎できない時があります。送迎のサービスの必要性を感じています。
- 帰省時の送迎について、今は何とか親が行っていますが、高齢化で難しくなってきています。移動支援も受けていますが、より利用しやすくなって欲しいと思います。
- 週末の帰省の送迎（親が高齢になり、免許返納し送迎が出来なくなるなかでの送迎中止は残念です）
- 現在息子はＧＨからの週末帰省を夫が送迎を行っておりますが、いずれ車を廃止した時には、法人にお願いしたいのですが、今は人材不足とのことで利用できない状況であります。

＜通所支援＞

- 事業所からショートステイの送迎の引継ぎがあれば助かります。なかなか待ち合わせ場所まで本人一人で行けない。慣れるまでではあるが、もっと移動支援が使えると良い。急な場合には使えません。
- 現在、通所施設まで徒歩で母親が送迎していますが、仕事や用事などで送迎時間に間に合わない時など代わりに担ってもらえたら良いと思います。
- 身体障害があるので、仕事場までの送迎サポート
- 通勤のサポートに移動支援を利用したくても、特別な理由が必要だったりしている。希望する時にすぐ使えるということが必要。通勤が市外になると移動支援が使えないなど。
- 現在は親が送迎していますが、できなくなった場合はお願いしたい。
- 市外のため、自宅送迎はしてくれません。あと数年で車の運転できなくなると思うのですが…
- 自力通所中だが、利用している路線への大幅な変更や廃止の際の練習
- 息子が家の中で暴れ、母ひとりの力では無理だったので、警備会社とか駆けつけてくれたらいいのにと思いました。
- 通所の時、付き添いの人がいてくれたら安心なんですが。又は作業所の送迎があればいいと思います。

副会長の全力つぶやき

- 短時間や緊急のケースに対応できる移動サポートを求める声は昔から根強いですよね。確かに性質上行政サービスとしての設計はかなり難しそうですが、凄まじい量のニーズが間違いなくあります。民間企業によるイノベーションを期待したいところです。
- 移動中に付き添い人がいるだけでも助かる、というニーズも昔からよく聴きます。家族に時間はあるが物理的な理由で付き添うことができない、という場合に限っては、現代はオンラインカメラで視界を共有できるようなシステム等を使って、「リモート付き添い」は充分可能だと思います。そんなアプリの開発が望まれますね。
- 「移動支援」ならぬ「移動訓練」なんて事業があるといいですよね。知的障がいのある方の中には「慣れてしまえばあとは自力で行ける」という人は少なくありません。半永久的に利用するのではなく、訓練によってフェードアウトすることを前提とした事業は、エンパワメントを目標とした福祉の理想形のひとつでしょう。もちろん移動支援の予算削減にもつながりますね。（同じ地域生活支援事業なので）「移動支援」や「地域活動支援センター」に併設できる事業だと、申請する法人もそれなりにありそうですよね。
- 高齢の方が運転免許返納をためらう理由には、老老介護のみならず、障がいがある子どもの移動があります。ここがクリアできると、間違いなく運転に不安がある方の自主返納は増えるでしょう。都道府県と都道府県警ないし厚労省と警察庁がタッグを組んで取り組んでいただきたいところですねぇ。

(7)短期・短時間の預かり、留守番見守り

＜帰宅後の居場所＞

- 現在高2で放課後はデイサービスを利用していますが、卒業後は使えなくなります。利用している事業所の福祉就労は時間が短く、学校に通っていた頃より身体を動かす機会等がぐっと減ります。体力は低下するだろうと思っています。何か余暇などに送迎付きで過ごせるような、活動できるような場所などが出来てくれたらと思っています。
- 作業所より帰宅後、時間が余ってしまうので、児童デイサービスのようなちょっと寄って遊ぶというようなところがあったらいいと思います。
- 就学中の娘は、放課後等デイサービスという行き場があり、数日でも利用することで現在は余暇時間に日々変化つけられる環境ですが、福祉事業所へ通う年齢になっても、事業所が終わった後に皆が集える放課後等デイサービスのような場所があると、本人の気持ちにメリハリもできると思うので、成人後にもあれば良いのにな…と思います。

＜短期入所（ショートステイ）・見守り・一時預かり等の充実＞

- 学校の授業時間が変更が多く、デイサービスとのすき間ができてしまう。小学生まではこれを児童クラブで補うことができたが、中学生になってからは親が仕事を休んだりして対応している。デイサービスの日数が増えるか、児童クラブのような放課後2時間を預かってくれるところがあると助かる。
- 親の介護が始まる時期なので、短期入所（急な）に対応してもらえたら助かる。急な対応をいろいろしてもらえるサポートサービスがあれば利用したい。
- 急なお願いが難しいので対応していただけるようになると良いと思います。
- 緊急時にお願いできるショートステイ（緊急は難しい場合が多い）
- 女性スタッフのいるショートステイ（女性スタッフがいなかったり、予定日の近くにならないと女性スタッフが入るかわからないと言われるのでなかなか頼めない）
- フルタイムで仕事をしているので、生活介護終了後、ホームヘルパーや行動援護を利用しているが、時間数が足りず、祖母に協力してもらっているが、祖母も高齢にてそろそろ限界。
  ショートステイは2カ所利用していたが、1カ所目はコロナで受け入れ中止。2カ所目は12月で閉鎖。生活介護の時間がもっと長くなるとか、ホームヘルパーの時間数をもっと頂けると助かる。（ショートの受け入れ先がない）残業になる時に電話1本で支援して下さるサービスがあると助かる。私はナースだが、夜間支援して下さるところがないので、夜勤できず。
- 土・日は事業所が休みのため、預け先がなく困っている。行動援護は混んでいてなかなか利用できなかったり、冬は行くところが減ったりで、またコロナで外出は気になる。ショートステイは夕方から次の日の朝に帰宅するので、結局土日びっしり世話をしなければならない。放課後デイサービスのように日中預かってくれるところが沢山あれば助かります。入院した時に数時間付き添いをしてもらえる制度があると助かります。とにかくどのサービスも少なくてなかなか利用できない。
- 親が病気（入院）になった時に緊急に過ごす場所
- 親の急な入院等の際、迅速にショートステイできるところの確保ができること
- ショートステイの日は荷物が多くなるので、自宅から施設までの送迎をお願いしたい。
- 高齢者(短期入所生活介護)のように気軽に毎月ｼｮｰﾄｽﾃｲが送迎付きで利用できたらよいと思う。
- コロナ感染が広がっているが、親が感染、入院したら子どもは誰が面倒を見てもらえるのか…？

- コロナ等の病気の時集団ではなく、サポートのある家があれば安心ではないでしょうか。常設する必要はないと思いますが。いつでも使用できるようにしてあれば、非常事態にすぐ役に立つでしょう。
- 夫婦のどちらか一方あるいは双方がコロナに感染して入院することになった場合の息子の面倒をどうやってみるのかについて、不安を抱いております。今は、万が一にも感染するわけにいかないと、細心の注意を払って過ごしておりますが、上記のような、監護者が入院した場合に、コロナに感染している（又はその可能性がある）けれども、介護を要し、親族による介護が期待できない障害児を引き受けてくれる施設・サービスがあれば、多少は安心できます。
- ショートステイはコロナの影響で利用不可となった。
- コロナで親が掛かった時に子を預かってくれる又は支援してくれるサポート（一人親家庭なので、家では他に見る人物がいない）
- 子どもが風邪などで学校を欠席する際の自宅での付き添い（ひとり親等）
- 帰宅時間前に自宅前に待機してもらい、子のカギで一緒に入ってもらい、親の帰宅まで一緒に過ごしてもらうサービスがあると助かると思います。（カギをかける、電気やストーブをつける手伝い、後は安全に過ごせるよう見守りだけ）
- 本人が事業所から帰宅したのち、父または母が帰ってくるまでの間、どこかで預かってくれるまたは自宅で一緒にいることをしてくれるサービス
- 親が近所に買い物等へ行くときに30分くらい本人と一緒に留守番してもらえるサポートがあればと思います。
- 急に親が病気になったり、どこかに出かける時に必要な支援があるといいです
- 毎月母が出張で留守にするので、その間はショートステイを使っているのですが、平日は生活介護で通所するので良いのですが、休日の活動に困っています。ヘルパーさんを頼んで外出していますが、どこへ出掛けるのか毎回悩んでいます。家ではテレビも見ず、趣味もないので、外出先やこんな催しものしていますなどの情報がもっとあれば、有意義に過ごせるかなと思っています。女性なので、家事をもっと身につけてくれるようになって欲しいと思っています。
- 家に来て話し相手になってくれるようなサポートが受けられればいいなと思います。
- 現在、通所・グループホーム利用で概ねカバーできている状態ですが、それは全て前もっての予定、スケジュールによる契約であり、それ以外の必要時30分1時間でもサポートしてもらえたら親の不安、憂いはかなり軽減されると思う。（親が急に通院など必要になったりした場合など、又そういう場合だけでなく、親自身の楽しみのための外出にも利用できると生活に心の余裕ができると思う。親が疲労困憊状態あったら、親子の顔から笑顔は消える、少しでも幸せな瞬間があるべきだと思います。実現至難なことかもしれませんが、すき間支援は大いなる救いになると思います。
- 同年代の子と関わりたいのですが（遊びに行ったりしたい）、本人達だけでは不安です。何かそういう集まりがあった時の見守りがあればと思います。

副会長の全力つぶやき

➢ 就労系事業所の後に、精神科デイケアのショートケアやナイトケアプログラムに参加されている方や地域若者サポートステーションに通われている人を何人か知っています。医療や行政サービスだけではなく、誰もが集えるコミュニティカフェ等も増えて欲しいですね。

- 通所系サービスには送迎加算がありますが、それ以外のサービスであっても送迎が求められる場面はありますよね。(高齢の親が多い)超高齢社会の日本では充分に検討に値することだと思います。既存の制度の拡大ですので…難しい検討ではないんじゃないでしょうか。
- 既にお子さん向けの留守番対応アプリなんかはありますよね。障がいのある方向けバージョンもニーズがありそうです。障がい程度によってはそれで解決できる人もたくさんいるはずです。
- 特に夜間は制度の「すき間」が集中した時間帯と言えます。生活の多様化の時代です。夜間対応・24時間対応の通所サービスや居宅サービス（夜間加算付き）があってもいいんじゃないでしょうか。まずは大都市圏からモデル的に、どうでしょう。

＜本人の学びの場（生活スキル等）＞

- 高等支援学校を卒業後も学べるところ。働きながら（福祉就労）並行して学べるところへ通える環境。（人間関係や自分の思いや考えを伝える力を身につける、日常生活を送るための必要なスキルを学ぶ）
- 将来マンションタイプの部屋＋ヘルパーさんでの一人暮らしを希望しているが、お金の管理・栄養指導・スマホなどの安全管理・ゴミ出しなどの社会ルールなど課題が残っています。これらはどなたも不完全な方が多いと思われるので、本人向けの勉強会などで少しずつ学習させてあげたいが、そういう場がない。ヘルパーさんにもそこを踏まえた方を期待したい。（ヘルパーさんに向けての学習会とかもあれば良いなと思う）
- ほとんど学校へ通わず、字もひらがなしか読めず、上手に書けないため、かき方教室に通わせていますが、小学生の生徒がいるとかで通うのを躊躇したり、塾は遠く、迷子になったりしています。学習に関する支援をして下さるサポートが何か他にないものか、試行錯誤しています。

＜健康づくりのサポート＞

- 息子が健康に生活していくために何か必要か？と考えるようになりました。一番気になることは、周りを不快にさせないこと、体臭・口臭などどのような事をすれば良いか？日々の生活の中、ちょっとした工夫でできる事、身体を清潔に保ったり、有酸素運動をしたり、食生活を見直したり、健康的な生活をおくるために大切なことをサポートしてくれる障がい者のためのサロン・ジム・食育講座等のサポートがあれば良いと思います。
- スポーツ活動を一緒にしてくれるサポート
- コロナ禍のため、現在福祉サービスで利用できているものは日中活動の生活介護のみとなり、休日の外出は全て親自身となり、体力的にも大変になっています。本人の運動不足もあり、体重が春よりも4kg程増加していることもあり、短時間でも運動不足の解消に繋がることができればよいと思います。
- 現行ではヘルパーさんと週に1回外出し、買い物・運動とサポートしてもらっています。また、あんりーさんと週1回運動に連れていってもらっていました。コロナ禍がどこまで続くのかわからない今、本当に外出もできず一旦運動も休止となり、コロナ太りと第1波の時（自粛したので2週間余りでしたが）どうしようもないことですが、運動不足は深刻と思います。家の方でも送迎時歩いたり努力はしていますが、目下の悩みです。

副会長の全力つぶやき

- 就労系事業所の後に、精神科デイケアのショートケアやナイトケアプログラムに参加されている方や地域若者サポートステーションに通われている人を何人か知っています。
- 自立訓練（生活訓練）と就労移行支援を併設し、特別支援学校卒のあと、４年間（自立訓練２年+移行支援２年）のモラトリアム期間を保障し、自立をサポートする取り組みをされている法人をいくつか知っています。一生において利用期間に限りがあるサービスの利用を若年期に決定するのはなかなか悩ましいところもありますが、モラトリアム期間を保障して自立のためのトレーニングを継続するというのは確かに賛成できる部分は多いです。障がいのある方々のモラトリアムの保障に取り組んでくれる民間企業が増えて欲しいと思います。厚労省の「障害者委託訓練」などを活用すれば企業も関わることができる社会的課題です。
- 学習困難の原因が、知的障がいによるものよりも、限局的学習症（学習障がい）によるものが大きく影響しているという場合は、学習指導の工夫によって改善されることも少なくありません。「アセスメント」や「システマティックインストラクション」ができる支援員＝ジョブコーチが支援する学習支援事業などがあれば面白いかもしれませんね。
- 障がいのある方の「健康づくり」のニーズは高いですよね。通所か、訪問型か、保健師や作業療法士等の有資格者が、軽運動や感覚統合、緊張緩和のストレッチやマッサージ等のプログラムを提供する…そういうサービス、民間はもちろんのこと、地域生活支援事業あたりで作れないですかね。
- 最近では、特別支援学校等の運動部もとても盛んになってきています。しかし、卒業後に繋がる活動環境がなく、せっかく続けてきたスポーツを止めるケースは少なくありません。プロスポーツチームが、近しいパラスポーツの部門を立ち上げるとか、企業が障がい者雇用を兼ねてパラスポーツの事業団をつくるとか、先があるといいんでけどね。スポーツが振興するためにはまずは認知度を高め注目されることが大前提となります。文科省（スポーツ庁）には、今以上にパラスポーツが注目されるための取り組みを期待したいところです。

(8)余暇などの支援

- 買い物支援　年齢性別に応じた衣類等の購入サポート
- 買い物助言　例えば年齢性別にふさわしい衣類の購入サポート
- 余暇活動、運動・買い物の見守り
- 生きがいや趣味を見つけるためのサポート
- 気分転換のための散歩や、大好きな本屋さん巡りをサポートしてくれるそんなサービスがあったら嬉しいです。
- 今は家族と送迎等をしていますが、色々なサポートをお願いしたくても、金額が掛かりすぎるようだとちょっと考えてしまいます。
- 今は親がサポートしていますが、先のことを考えると不安なことが沢山あります。主人が車の運転ができなくなったら移動のサポートや、ドライブが好きなので楽しみとしてのサポート。
- 現在月～金曜日まで通所事業所に地下鉄で一人で通っています。土・日曜日が休みなので、余暇のサポートをお願いできればと思っています。（例えばランチ・お風呂など）

- 今まで自宅へ帰省した時は楽しみにしている入浴施設や外食へ連れていったり時には宿泊施設へ泊ったりさせていました。これも親の高齢に伴い、親が全部担うのがしんどくなってきた時には、これらの余暇（活動）を手伝ってくれるサービスがあって、子どもが引き続き楽しめることができればと願っています。
- 帰省時、自宅からの外出を支援してくれるヘルパーがあると良い（親が高齢になり、外出に付き合えなくなるため）
- 夜間本人の知らない場所へ行くとき
- 本人と旅行に行ってくれると良いと思う。
- 障がい者と家族が参加できるツアーで、ヘルパーも同行していただき、旅行をサポートしてくれるサービス
- 宿泊を伴う旅行に行かせたい。
- 余暇活動で泊りの旅行のサポートがあれば良い。
- 移動支援事業所が休止となり、作業所の行事も全て中止、このような時期に他のサポート、サービスが思いつきません。言葉に出して伝えることが苦手な分、我慢ばかりさせてただただかわいそうです。
- 余暇について支援して欲しい。コロナになる前は休日ヘルパーさんと一緒に出掛けていたが、サービスの縮小によりそれが出来なくなっている。家族では限界な部分もあり、困っている。
- レジャー・旅行などの機会を増やして欲しいです。
- 時間外の外出や集団行動など職員の都合などで対応できないことが多くなったので、生活上で少しの楽しみなどを復活させてほしいと思います。
- 入所施設等包括しているところで、散歩やちょっとした買い物に行かれるようなサポートがあれば良いなと思います。
- 息子はグループホームで生活しているが、余暇の過ごし方がマンネリ化している。ヘルパーさんとの外出（ドライブ等）しているが、福祉サービスは利用時間に制限もあるので、短時間の散歩など一緒に行ってくれるような方がいるとありがたいです。
- 親以外の人とも本人が楽しめるようにサポートを期待（遊園地・プール・ボウリング・買い物・散歩等）。入所していてもサポートは受けられるのでしょうか？うけられるなら、帰省しない土日に外出のサポート、室内での遊び相手
- 行動援護を使って一年に一度でもヘルパーさんと温泉に行けたらと思っていますが、必要な時間数としてなかなか扱ってもらえない。
- 小学生なので、まだまだ遊びたい時期なのですが、公園で遊ぶと寒い季節は自分で車に戻ろうとしてしまい、冬の間は本当に遊びに行く場所が困ってしまいます。冬の間だけでも土日屋内で遊べる広い場所があればいいと思います。（例：土日の学校等の体育館の開放など）
- 家と施設だけの往復だけではなく、休みの日に通えるところがあったらいいなと思います。料理・運動・音楽（てんかんがあるので、ガイヘルを使うのは躊躇してしまいます）楽しめる場所を増やして欲しいです。

副会長の全力つぶやき

- 余暇支援を求める声は多いですよね。移動支援で対応できる部分もなくはないですが、マンツーマンの関わりになるため事業所のマンパワーの問題もあり、なかなか需要に供給が追い付いていない状況が昔から続いています。このコロナ禍で、経営が苦しくなった旅行代理店は数多くあると思いますが、障がいのある方向けの、旅行ツアーや買い物ツアー、趣味を満たせるようなマイクロツーリズムのようなものを実施した場合、会社に補助金が入る仕組みとかはどうでしょうか。指定の研修を受けた社員を配置する等の条件を付けたりして。
- 自治体を跨ぐ、日を跨ぐなど理由で、遠出の旅行等に移動支援は使用が難しいですよね。行った先で現地のヘルパーにバトンタッチできる仕組みなどができれば解決できるケースもあるかもしれません。
- 例えば、遊園地などのレジャー施設のスタッフの大半が福祉支援を学ぶような研修を受けていて、さらにそこの送迎バスにもそんなスタッフが同乗していて…というようなところがあれば、移動支援のヘルパーが付いていなくても、安心できるところもできるんじゃないでしょうか。CSRやホスピタリティ向上の観点から、そのような取り組みに注力する企業が増えて欲しいと思います。
- 精神科デイケアのなかには、カルチャーセンターのようにプログラムが充実しているところも少なくありません。場所によっては昼食・夕食を食べることができたり、（医療機関なので）体調不良をすぐに相談できたり…利用を一考してもいい社会資源だと思います。

(9)その他

＜情報が欲しい＞

- 親も高齢になりました。今後の生活についていろいろ知りたいと思いながらの毎日です。具体的というより、話を聞きたいです。
- まだ子供が中学生のため、勉強不足でサポートしてほしいことがよくわかりません。調べる時間がなく突っ走ってきました。
- 親なき後のため、今から準備すべき内容について講義を受ける機会を設けて欲しい。
- こういうアンケートを毎年行うとか、地域に細かく相談できるところを増したり、担当者が複数で変わらずサポートしていただける福祉サービスが区役所などにあちこちあると良いと思います。
- 同じような障がいの中まで集まれたり、相談したりできるようなサロンなど気楽に話せる場のサポートがあったらと思います。
- これから必要になると思うがよくわからないので「こんな時」みたいな冊子があるととても助かります。
- クラブ活動のような習い事（サークル）などのサービス・オンラインで情報の共有
- もっと作業所やショートステイやグループホーム、余暇等の情報が欲しい。いつも親たちの口コミで知るばかりなので。
- 将来にむけてのお金・住まい・生活に対しての情報をいろいろうけたい。
- 休日にどこかの事業所を利用して親以外との活動をさせたいのですが、どこが良いのかよくわからず、情報があると助かります。

- 親が対処できるうちはたぶん心配していませんが、親なき後に、本人に対するサポート等を姉本人自身が受けやすい（依頼しやすい）福祉の環境になっていることを願います。親以外の家族・親族が分かりやすいフローチャートの様な「こんな時（困りごと発生の時）どうしたらよい？」のような。当事者にどれ（困りごと）に該当しているのか？⇒どこにサポートを求めたら良いか？等。
- 障がい者が出席しやすい行事（例　小さなコンサート・運動等）の情報をこまめに知れたら良い
- 現在はまだ小学生なので、また具体的なイメージが湧きません。
- まだ小学生のため今はそれほど困ることはありませんが、きっとこの先成長するにつれ、色々なサポートが必要になってくるのかと思います。今はまだどんなサポートやサービスがあるのかということ自体私が把握できていないので、これから勉強していきたいと思っています。
- 今はまだ、自分も子どもも元気で同居しているので、あまりサポートを必要としていないのですが、将来必ずあったらいいなと思うことが出てくるでしょう。（すみません、想像がつかなくて）

＜支援者の資質向上や人手不足解消＞

- 就労場所やグループホームでの支援者の質の向上
- 既存のサービスも人手不足で使える回数が限られているので、まずそこを十分使えるようにしてほしいとも思う。定期的だけではなく、急な時に対応してもらえるところようなところも欲しいです。
- まずは今ある制度・サービスが十分使えるように人手不足をなんとかして欲しいです。
- 家族による送迎の他に行動援護による送迎をお願いしているが、事業所の人材不足により確保ができない時も多く、送迎専門のサービスが多様にあると良いのにと思う時があります。
- 現実にはいろんなサービスが使えても、人材不足が解消されない限り、いつでもどこでも安心して利用できない状況がサポートに繋がらないと思います。

副会長の全力つぶやき

- 各自治体は、公的サービスの情報をまとめた各種媒体を作っています。各地に社会福祉協議会等は、民間サービスの情報をある程度集約しています。それでもやはり、当事者やご家族が欲しい情報すべてを満たすことはできません。福祉に関わるサービス提供、地域・企業の企画等を自由に投稿できるサイトのようなものが、（すでにマイナーなものはいくつかあるハズなのでその中から）メジャーなものが２～３つ出来上がってくるといいんですけどね。
- 職員の質の向上がもとめられるような分野は、競争原理が働いていないことが原因のひとつとして挙げられます。利用する側が客観的に評価できる基準は現時点ではほぼありません。なにを以てその事業所を評価するのか、というのはとても難しい問題ですが、それならば逆に、それぞれの事業が公開可能な数字はすべて公開するくらいの試みがあっても良いと思います。おのずと、数字が示す傾向が分かってくるのではないでしょうか。
- 介護福祉分野の職員の年収増を図るための検討が国で進められていますね。この波が、障害福祉分野の居宅介護事業にも伝播して欲しいと思っています。

第３章　シンポジウム

１．実施概要

(1)目的

知的・発達障がい等のある方々の「親なき後問題」を起点に「こんな福祉事業が世の中にあれば安心」という、幅広（官民問わず）かつ具体的なアイデアについて、各団体の有識者から意見聴取し、ソーシャルアクションを活性化するための充実した資料を作成することを目的とします。

(2)名称　「アイデアの種をたくさんつくるシンポジウム」

(3)日程　令和３年８月26日（木）13:00～15:00

(4)開催方式　オンライン会議アプリケーション『Zoom』を使用し、リモート体制にて開催

(5)プログラム

① 主催者挨拶（札幌市手をつなぐ育成会　会長　長江　睦子）
② シンポジウム趣旨等説明
③ 参加者自己紹介
④ 各グループ　ディスカッション
　休憩（グループ分け解除）
⑤ 各グループ代表者発表及び参加者感想の共有
⑥ 閉会（発起人）挨拶（札幌市手をつなぐ育成会　副会長　中島　紀久代）

(6)参加者等一覧

【シンポジウム参加者】
長江　睦子　（札幌市手をつなぐ育成会　会長）
中島　紀久代　（札幌市手をつなぐ育成会　副会長）
田代　郁子　（札幌市手をつなぐ育成会　広報部長）
一條　さゆり　（札幌市手をつなぐ育成会　教育施策推進部長）
小島　佳代子　（札幌市手をつなぐ育成会　福祉施策推進部長）
那須　美智代　（札幌市手をつなぐ育成会　福祉施策推進副部長）
高木　麻裕美　（札幌市手をつなぐ育成会　地域活動部長）
佐藤　春光　（北海道手をつなぐ育成会　会長）
松岡　円　（北海道自閉症協会　札幌分会札幌ポプラ会　会長）
齋藤　寛子　（ことばを育てる親の会 北海道協議会　理事）
星野　直子　（北海道札幌伏見支援学校　前ＰＴＡ会長、
　ラジオパーソナリティ「直子のアタック781」）
白石　未佳子　（北海道きょうだいの会　代表）
小野寺　拓　（Sapporo Action　幹事）
相内　雄介　（Mental-Consul　代表、札幌市手をつなぐ育成会　副会長）
【進行】
深宮　しのぶ　（札幌市手をつなぐ育成会　事務局長代理）
【リモートシステム管理兼タイムキーパー】
酒井　秀治　（株式会社SS計画　代表取締役）

2．グループディスカッション

(1)実施方法

- 全体でディスカッションの流れを確認後、Zoomブレイクアウトルームを活用し、参加者を２つのグループ（A、B）に振り分け。
- 各グループに、グループリーダー、進行役（ファシリテーター）を置き、Googleジャムボードにより意見を集約・分類化。
- ディスカッション後、各グループの代表者により発表、全体で共有化。

＜Aグループ＞

一條さゆり(グループリーダー)、小野寺拓(ファシリテーター)

長江睦子、小島佳代子、那須美智代、佐藤春光、白石未佳子

＜Bグループ＞

高木麻裕美(グループリーダー)、相内雄介(ファシリテーター)

中島紀久代、田代郁子、松岡円、齊藤寛子、星野直子

オンラインでのシンポジウムの様子

(2)ディスカッションのまとめ（Googleジャムボード）

＜Aグループ＞

●移動の支援

・入院や通院への支援（特にコロナ感染対策も含めて）
受診同行で、親以外に先生に体調等を伝えてくれる人
親子入院と同じように、入院の付き添いをしてくれる人
→そもそもあまり通院機会が少ない。歯科のみ。
移動支援、グループホームの支援員が付いていく

・親が抱え込まずに、やってくれるところに積極的にお願いしていく
→健康を守るためにも積極的に、定期的に受診できるようなサービスが必要
→どこの病院でも同じようにサービスを受けられるように

・ちょっと気軽に移動の支援をしてくれるサービス、ボランティアのようなものがあるとよい

・街をまたいで移動した際の移動支援
（旅行先ホテル内等の入浴介助（同性介助）など
・ TDLの激しいジェットコースターに本人だけが乗りたい！乗るところまでの支援など
あるいは、乗りたくない本人と一緒に待ってくれているサービスなど）

・グループホーム内で一緒に家事をしてほしい（洗濯のたたみ、調理の火の始末など）
→ぬくもりサポートの充実も含めて、家事のちょっとしたすき間をしてほしい

シート１

●集まる、知り合う

近所の人と知り合うきっかけ作りのサービスがあるとよい
→（稚内市）地域活動センターが障がいに関係なく、近所の人が集まり、
カラオケしたり、ご飯食べたり
→（当別町）ごちゃまぜの集まり、障がい、高齢者、児童など

・高等支援学校の卒業後の集まる場、おかえりなさいコール
→訓練目的ではなく、音楽や英語を学びたいなど（青年学級）を再開できたら、
お金の管理などを学べる勉強会など
＝余暇の充実に繋がり、給料アップ、仕事への意欲にも
・オープンカレッジを実現したい
（チャレンジキャンパスは一つの障害福祉サービス事業所）

youtubeで配信している工作会などはこのコロナ禍でも続いている

●金銭管理

日常生活自立支援事業の土日の利用、専門員の増員を、もっと気軽に使えるように
例えば、区役所から来た文書を見てもらう、定期預金の解約など

シート２

●土日の支援（一人で困ったとき）
気軽に困ったときに相談できる場、相談室も土日対応は難しい
→24時間体制で応じてくれる相談できる場所
→LINEで聞くと知恵袋のように返ってくる、直接電話でなくてもいい
（文字、メッセージで話したほうが伝えやすい、聞きやすい場合もある）
☆対応してくる人（サービス）も自宅で対応できる。
例えば、一人２時間で5人いたら、日中は大丈夫
定形の相談事であれば、AIで応えてくれる？かも（札幌市のワクチン窓口のように）

●教育（生きていく力を伸ばす「学びの場」）
・中学は高等支援学校に行くことが目的、高等支援学校は就職が目的
→本人への学習機会の確保、大学のよう場が義務とまで行かなくても国が保証するのあり
・学できる選択肢があるとよい（進学も目的にしてもよいのでは？）
高等支援学校は高校卒業扱いにはならないが、大学は受験できる？
・障がいが重くても、歴史や旅行先のことを知りたい、外国の人と話したい、
本人たちの興味関心を伸ばす機会の場があるとよい＝大学（好きなことを突き詰める）
・IQで区切る学校制度ではなく、弱いところを補う、強いところを伸ばす、人格教育
今の大学制度に乗っかるとできるできないの線引きになってしまう

シート３

●（親や家族間で）情報の格差がある
・親によって知っている情報と知らない情報の差がある
→育成会で順番に動画を見れば制度がわかるものを作るのはどうでしょうか？
→育成会youtubeチャンネルで作る！5分、10分でわかりやすく

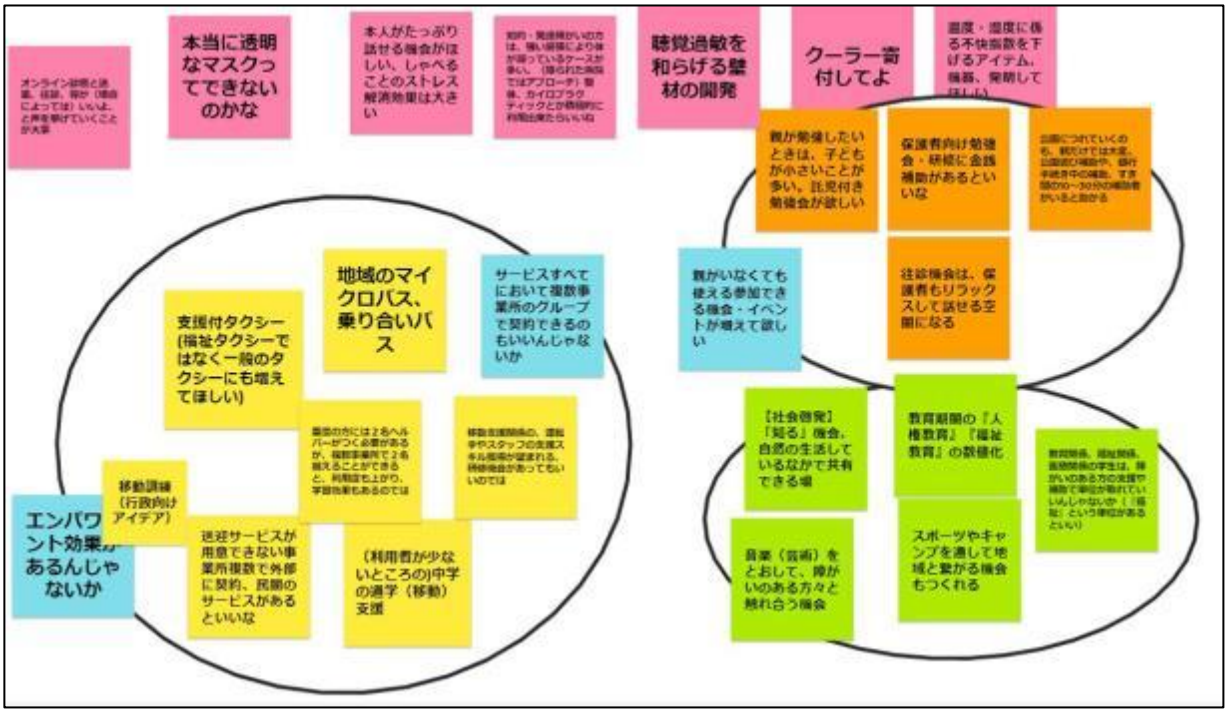
●相談できる場所
・きょうだいの会でもアンケートで多かったのが気軽に相談できる場が必要
→きょうだいは相談室に登録できない？保護者の意見が優先される？
本人と保護者だけではなく、家族みんなが相談できるはず、
場合によっては叔父叔母、いとこ、はとこ、姪甥など。
親族も一人の支援者として相談できるように＝近所の人も支援者になりうる
☆その人に関わっている人であれば、誰もが支援として相談できるように
家族以外の方が第三者の視点で見えていることもある。
親ができないと思っている（過小評価）＜周りの方の目線
・親も二通り、なんでもできると思う親と待てない親
一緒に連携し合う＝最終的には「手をつなぐ」
各団体が個々の活動に加えて、団体同士の繋がりが必要
・今まで見てくれていた近所の人たちも高齢になってきている、頼れなくなってきた
・本人に関わる人を増やす＝いろんな福祉サービスを使う、支援会議にどれだけ多くの人が集まるか

シート４

●支援者を増やす
・近所の人
・福祉サービス事業所、日自の支援員を増やす
・大学のボランティア団体（一生懸命な先生による？何年たっても変わらないように）
→学びの場にも繋がる。大学生との繋がりを大切に。
・「＃7119」のようにガイダンスしてくれる「つなぎ屋」が必要？
→団体と団体とを繋ぐ、個人（の先生）に頼ると個人の熱量に左右される

シート５

＜Bグループ＞



(3)グループディスカッション総評

- Aグループは、行政サービスの拡充を中心としながら「すき間」の埋め方を議論。制度設計の段階まで話が及び、あらためて福祉施策のすき間が再確認できました。
- Bグループは、より柔軟に、「すき間」を埋めるためのツール等のブレインストーミングを含めて議論。知的・発達障がいの方の課題解決だけではなく、ユニバーサルデザインにつながる意見がいくつも挙がりました。
- 参加者はいずれも各団体の代表者級。まずは、それぞれの構成員などから集められた現状の不満から吐き出すかたちで始まりましたが、ひとつの課題に多方向から切り込みが入ると、次第に解決の可能性を感じさせるビジョンが削りだされ、形作られていく様子が印象的でした。

３．シンポジウム参加者紹介

◆札幌市手をつなぐ育成会

1959年（昭和34年）の結成から今日まで60年以上、「知的障がいのある人とその家族の幸せ」を願い、みんなが、地域で、普通に、「ともに生きる」ことができる社会の実現をめざして活動を続けている「親の会」です。

〇会長　長江睦子
参加の方々から、たくさんのアイデアの種を出していただき、とても良いシンポジウムになりました。これを、本人達の支援につながるように、行政や企業などに取り入れてもらいたいと思っています。

〇副会長　中島紀久代
他団体の方とＺＯＯＭでお話をして、とても良い時間を過ごすことができました。ひとつ、本人のニーズにより地域で訪問医療・介護が増えれば、本人・親の安心になるのになぁと思いました。

〇地域活動部部長　髙木麻裕美
これはムリ…こんな事できない…自分で決めつけていた事が皆さんから出されるアイデアで、できるかも！に。様々な立場の方のお話しはとても刺激になりました。

〇広報部部長　田代郁子
身近な人を巻き込んで障がいに対する理解が深まっていくような、今あるサービスのすき間を埋めることで、本人たちの生き辛さが解消されていくような、親も元気になるシンポジウムでした。

〇教育施策推進部部長　一條さゆり
色々な立場の方達からお話しを聞くのは、大変勉強になりました。“あったらいいな”が“あって当たり前”になることを願います。

〇福祉施策推進部部長　小島佳代子
特に印象に残ったのは、高等支援学校卒業後の学びの場の提供。体験や知識取得に時間が必要な人が生涯学べる環境を整備したいと思いました。具体案はまだ分かりませんが。

〇福祉施策推進部副部長　那須美智代
他団体の方ともいろいろな話ができ大変有意義でした。良い支援にはたくさんのつながりが必要と感じています。可能であれば、定期的にこのような交流の場があってもよいと思いました。

◆北海道手をつなぐ育成会

「どんな障がいがあっても、生まれ育った地域で普通に暮らしたい」それが私たちの願いです。知的障がいのある人とその家族、そして支援者でつくる全道組織です。

〇会長　佐藤春光
札幌市手をつなぐ育成会のご努力にまず感謝申し上げます。今回の企画に参加させていただいたおかげで、障がい者団体が横のつながりをしっかり持つことの大切さをあらためて認識することができました。そして何よりもすき間の出来ないがっちりとした制度設計が必要な事も再認識することができました。

◆北海道自閉症協会　札幌分会札幌ポプラ会

親・本人・支援者が対等な立場で活動できるよう、自閉症児・者およびその家族・支援者のために活動しております。皆様のご協力にいつも感謝しております。

〇会長　松岡円
様々な立場の参加者がいる事で、それぞれの視点から物事をより具体的に考えることができました。共有することが出来た事も良かったです。オンラインの新しい取り組みの企画をしていただき、ありがとうございました。

◆ことばを育てる親の会　北海道協議会

当会は「ことばの教室」に通級している・通級していた子どもの保護者と先生たちが所属し、ことばに心配のある子（者）の幸せを願い活動する会です。

〇理事　齊藤寛子（札幌市ことばを育てる親の会　会長）
それぞれの活動分野から得られてきた知見をもとに「あったらいいな」を語るのは、非常に楽しく、学びにも繋がる有意義な時間でした。福祉に関わる団体同士の交流はこれからも必要と感じました。

◆ラジオカロスサッポロ「直子のアタック781」

（月）15：00～16：00　ラジオカロスサッポロ　ＦＭ78.1Ｍｈｚ　大人も子供も障がいがあってもなくても、皆ごちゃまぜで楽しめるラジオ！をコンセプトに息子を通して見える世界や日々の発見を愉快に発信中です！！

〇ラジオパーソナリティ　星野直子（北海道札幌伏見支援学校　前ＰＴＡ会長）
今回はシンポジウムに参加させて頂き、ありがとうございました。皆さんのお話を聞きながら、共感したり、新しい気付きがあったり、とても有意義な時間でした。子供達が幸せに暮らせ親が安心して生きていける様、今後も繋がって考えていきたいと思っています。

◆北海道きょうだいの会

障害児者・病児者の兄弟姉妹の自助グループ。茶話会や学習会の開催（オンライン有）、ＳＮＳやウェブサイトでの情報提供を行います。主に札幌で活動中です。

〇代表　白石未佳子
福祉サポートの不足は家族の家族としての機能を損ないます。きょうだいは障害者と対等に互いの自立を考えられます。このようなテーマいついては今後も保護者団体と協力して検討していきたいと感じました。

◆Sapporo Action

Sapporo Actionは病院や地域、職種の壁を越えて明日に使える知識や技術を共有し、交流を深める支援者のネットワークです。

〇幹事　小野寺拓
家族として、日々の生活場面での困り事を、とてもリアルに、時に切実に、話される姿が印象的でした。生活感溢れるディスカッションは、多くの人に聴いてほしい！そんな、学びの多い会でした。

◆Mental-Consul

精神保健福祉コンサルタントとして、福祉法人及び事業所の人材育成やスーパーバイズ、コンサルテーション、製品ブランディングをはじめ、企業の障がい者雇用、メンタルヘルスやリワーク支援、福祉業界とのコラボレーションによるSDGs・CSR企画のプロデュース等をお引受けしています。

〇代表　相内雄介　（札幌市手をつなぐ育成会　副会長、フクシキカク法人準備事務局　共同代表）
障がいのある方が抱える困りごとは、だれもが使いやすい・暮らしやすいというユニバーサルデザインの「たね」にもなります。困りごとは、細分化して具体化していくことで行政・民間・教育機関という「畑」に撒きやすく、そして芽吹きやすくなります。一緒に芽吹かせたい！という方がいらっしゃいましたら、ぜひともご連絡ください！

福祉制度・サービスの「すき間支援」に関する調査・研究報告書

[Sustainable　Welfare　Idea Book]

◆発行日　：　令和4年3月
◆発行　：　一般社団法人　札幌市手をつなぐ育成会
住所　〒060-0808 札幌市北区北8条6丁目2-15
TEL　011-738-2221
FAX　011-738-2228
E-mail　info@sapporo-ikuseikai.or.jp
web　www.sapporo-ikuseikai.or.jp/
◆助成　：　社会福祉法人札幌市社会福祉協議会
◆企画・編集：　相内雄介（Mental-Consul　代表、札幌市手をつなぐ育成会　副会長）
◆デザイン　：　酒井秀治（株式会社SS計画　代表取締役）